

思いや意図をもって表現する子どもを育てる

～「かく」ことを通して～

田辺 麻衣子

思いや意図をもって表現するための手立てとして「かく」ことが有効ではないかと考えた。「かく」とは、絵や言葉で感じ取った内容を表すことである。きこえた音をどのように感じたのか、曲のもつ雰囲気やをどのように受け取っているのか、「かく」ことによりわかることがたくさんあるのではないかと。そこで鑑賞の中で「かく」活動を組み込み、絵や歌詞で表すことから曲想にせまられるようにした。さらに、何度も繰り返して曲を聴いているうちに、どの子どもも自然と旋律を口ずさめるようになっていった。また、土台としてお気に入りの音を見つける活動から、さまざまな音・楽器に触れたり、見つけた音を言葉と演奏で紹介したりすることで、曲中の登場する音に集中して耳を傾けられるようになった。

キーワード：かく、思いや意図、曲想、鑑賞

1. 低学年における「思いや意図」とは

低学年での目標では「思い」という言葉に限定されているのだが、中・高学年での「思いや意図をもって表現すること」につなげていくために、やはり低学年から「思いをもつ」ことができる活動と「思いを表現する」ことができる活動を積み重ねていくことが大切だと考えた。

○思いや意図をもつためには

- ・見る、聴くに加えて触れることを大切に。さまざまな楽器に触れ、演奏することで音や音の変化に気付くようにする。
- ・少しの時間を使ってさまざまな曲の鑑賞をする。

○思いや意図を表現するためには

- ・絵や擬音語・擬態語などで「かいて」目に見える形で残すことから思いを表現するための手助けとする。
- ・同じ曲で正反対の思いや意図（例：明るい・暗い）を表現して比べることで具体的な表現技能を身に付けていく。
- ・朝の会で毎日歌う時間を確保する。

具体的にさまざまな曲の鑑賞というのは、NHK教育番組「クインテット」での演奏を試聴するようにした。クラシック曲は低学年の子どもたちにとっては少し長いものが多い。どうしても途中で集中力がぎれてしまうことがある。しかし、クインテットで演奏される曲は全曲ではないが、曲の中心部分は残しながら3分ほどでアレンジされていて子どもたちの耳に残りやすい。また、朝の会で歌う歌も子どもたちがあまり知らない曲を選ぶようにした。これらのことから、幅広く曲を知ることにつながっていった。

ここで大切にしたいのが、子どもたちの「好き」という気持ちである。「この曲が好き。」「この音が好き。」「この歌が好き。」と胸を張って言えることが音楽の魅

力にせまっていく第1歩ではないか。子どもたちがお気に入りの1曲に出合える機会をたくさん与えたいと考えた。

さらに、どうして好きなのか理由が言えることも大切である。なぜ自分がそのように思うのか、言葉などで表現できることが子どもたちの音楽の世界を広げていくのではないかと。「〇〇の音がきこえて〇〇みたいだからこの歌が好き。」というように思いをもつことにつながっていきと考えた。

そして、1人の子どもがもった思いを全体で共有したり、1人ひとりの思いの違いを受け入れ合ったりしながら、音楽が楽しいと思う子どもを育てていくことができる考える。

2. 「かく」ことを通して

「かく」ことを通して、思いや意図をもって表現できるように実践を進めた。

- ①感じたことを言葉や絵で表すことで、思いや意図を表現することができているか実践する。
- ②どの場面で「かく」活動を取り入れることが効果的であるのかを実践する。
- ③「かいた」ものを共有することでどのような学びの質の高まりが見られるのかを検証する。

3. 授業の実際

ここでは、題材「いい音をかんじてあそぼう」～『シンコペーテッドクロック』～について報告する。

3. 1. 「すきな音を見つけよう」より

『シンコペーテッドクロック』の鑑賞へとつなげていくにあたり、まずはいろいろな打楽器の音を知り、音色や響きの違いに気付くようにした。

用意した楽器は『シンコペーテッドクロック』に登

場するウッドブロック・トライアングル・カウベルを含む16種類。他にははず・カスタネット・タンブリン・小だいこ・大だいこ・ボンゴ・木琴・鉄琴・ギロ・スレイベル・トーンチャイム・シンバル・マラカスである。これらの打楽器で自由に子どもたちが音遊びできるようにした。



写真1. 音遊びをする様子

音遊びを楽しんだ後、子どもたちにお気に入りの音を紹介するように伝えた。見つけた音を擬音語で表現したり、どんなところが好きなのか理由を説明したりするようにした。子どもたちは「スレイベルのシャンシャンという音がきれいで好きです。」や「カウベルの音が長くひびかないところが好きです。」のように音色の特徴をよくとらえて発表することができていた。また、「たたき方で音の大きさがかわるから大だいこが好きです。」のように奏法の違いから生まれる音色の変化に気付く子どももいた。音遊びの中で発見したことやきこえた音を言葉に置き換えて表現したからこそ、それぞれの打楽器について興味をもつだけでなく、楽器の名前と音色を結びつけて理解することができたと考える。

さらに、ここで「かく」活動を付け加えた。楽器の仲間分けである。教科書では材質の違いで仲間分けした打楽器の絵が紹介されている。材質の違いだけではなく、子どもたちの考えで仲間分けをするようにした。

ワークシートを見ると、多くの子どもたちは材質の違いか奏法の違いで仲間分けをしていた。多くの子どもたちはワークシートから3つのグループに分けていたが、中には2つに分ける子どももいた。(表1・図1)

分け方	人数	主な理由
材質	13人	・木と鉄と皮 ・木と鉄とそれ以外
奏法	9人	・手でならず楽器、ぼうでたたく楽器、楽器を動かして当てる楽器 ・ふってならずもの、両手でたたくもの、片手でたたくもの ・たたくもの、ふるもの、するもの

音や自分の感じ方	3人	・大きい音、よくひびくもの、あまり使ったことがないもの ・小さい音のもの、大きい音のもの
その他	3人	・外国の楽器とそれ以外の楽器

表1. 子どもたちが考えた仲間分け

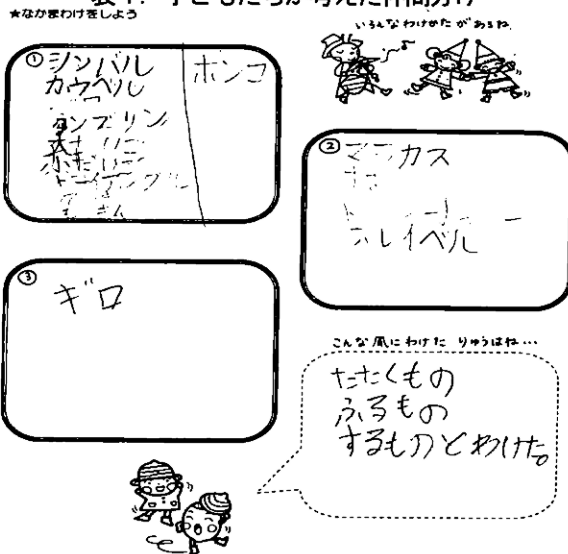


図1. ワークシートの例

仲間分けをするという課題があることで、子どもたちはただ音遊びをするのではなく、材質に加えて形・音色・奏法などに注目するようになった。また、お互いの方法を共有し合うことでそれまで気付かなかった仲間分けの仕方に気付くこともできた。

3. 2. 『シンコペーテッドクロック』より

『シンコペーテッドクロック』のCDはたくさんあって、まず、どれを子どもたちに与えるのが重要であった。教科書CDでは最初から最後までウッドブロックの音が入っていたため、曲想の変化を感じ取りにくいと考えた。また、曲の途中で表れるベルの音も演奏によって違う。打楽器の学習をしてきたので、トライアングルで演奏されているものを選びたいと考えていた。結果、アーサー・フィードラー指揮、ボストン・ポップス管弦楽団のものを選んだ。

初めて曲を聴くときには、ウッドブロックの音色に注目するように伝えた。子どもたちはすぐに気付くことができていた。その後、ウッドブロックが時計の音であることを知らせ、リズムの変化に気付くことができるようにした。繰り返して曲を聴きながら曲の構成を見つけたり、実際にウッドブロックをうちながらリズムの変化を感じ取ったりした。(写真2)このように、ウッドブロックに焦点を絞ることで他の打楽器の音(トライアングル・カウベル)に注目することもできているようであった。

また、子どもたちの発見を板書していくことで曲の構成を整理したり、気づきを共有したりできるようにした。(写真3)



写真2. リズム打ちをする様子

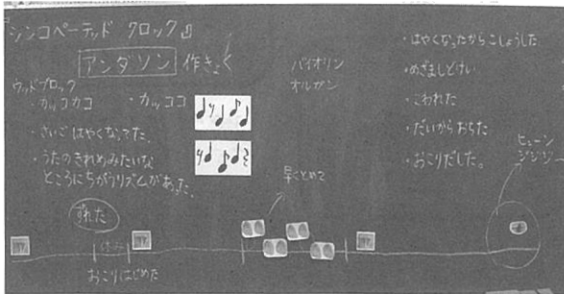


写真3. 子どもたちの発見

次に『シンコペーテッドクロック』に出てくる時計が最後どうなったのかを考えるようにした。場面を絞ることで子どもたちは考えやすくなったようであった。「故障した。」「台から落ちた。」「怒った。」というようにさまざまな考えが出たところで、「かく」活動を行った。好きな場面の時計の様子を絵と言葉でかくようにした。

選んだ場面を見ると、最後の部分を選んだ子どもが19人、最初の場面を選んだ子どもは6人、真ん中のベルの部分を選んだ子どもも6人であった。(複数回答含む) またかいた絵を見ると、時計を登場人物のように見立ててかいている子どもが圧倒的に多し中、自分の絵をかいて時計をわきにかいている子どもも5人いた。(図2)

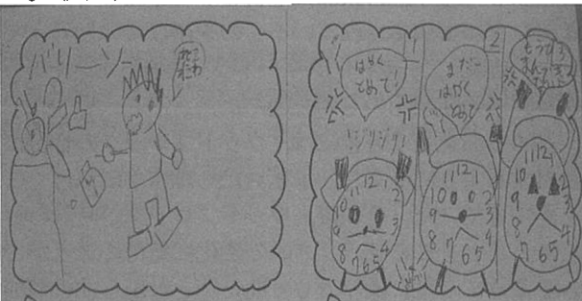


図2. ワークシートの例

本来ならば、この絵をかいた時点で題材が終わることがほとんどであろう。今回は、さらに「かく」活動を加えた。歌詞作りである。歌詞にすることで言葉を選んだり、曲にあわせようと集中して聴いたりすると考えた。曲の中で5回繰り返される旋律に歌詞を付ける活動である。繰り返し流れるCDと前時の板書を視覚的にまとめたものと自分でかいた絵をもとに歌詞作り

を行った。約8小節であるが、子どもたちは真剣に取り組むことができていた。(写真4)

子どもたちが考えた歌詞をいくつか紹介する。

○とけいせいじんが おこりでしたらこわい
 ピヨピヨピヨヨヨ びっくりばこでたよ
 ○いったいほくは なんのためきったんだろ
 なんかいならしても みんなはおつきない
 ○はやくおきてよ チリンチリンなっているよ
 はやくおきてよ ちこくしてしまう
 ○ときははやくいよ いまこわれるとき
 ほくもしらなかつた こわれるうんめいのひ

内容を見ると、時計がこわれてしまった・起きてくれないから時計が怒った・みんなで時の世界へ遊びにいこうといったものが多かった。



写真4. 歌詞を作っている様子

4. 授業の考察

曲全体に歌詞を付けるのではなく、5回繰り返される旋律に限定して歌詞作りを行った。また、子どもがイメージしやすい場面を選んで歌詞を作れるようにした。①曲を常に流す・②曲の流れを視覚的に整理して掲示・③前時に描いた時計の絵(ワークシート)の3つを手がかりに課題に取り組むことができるようにしていたが、主に自分の描いたワークシートの絵を手がかりに歌詞を作っているようであった。

最初は戸惑っている子どもも友だちの考えた歌詞を見るだけでなく、一緒に歌うことから気付くことも多かったようである。友だちの歌詞で歌ってからは、1人で集中して考える子どもが増えた。作った歌詞を見ると、シンコペーションのリズムに合わせて「っ」を入れている子どもがいたり、擬音語を旋律に合うように入れていたり、曲に合うように吟味することもできていた。

「かく」という活動を加えることで1人1人の子どもがどのように感じ、考えているのかがよくわかった。しかし、5回繰り返される旋律のうち何回目の旋律の歌詞を作ったのかわかるようにしておけばもっとよ

かったのではないかと感じた。そうすれば、曲のどんなところをとらえて歌詞を作っているのかを理解しやすかったのではないかと考える。

5. 成果と課題

思いや意図を表現できる子どもをめざして研究をしてきた。鑑賞領域で子どもが体を使って感じることに加えて言葉にこだわった活動を取り入れた。気付いたことや感じたことを絵から、歌詞という言葉に作りかえることで自分の思いや考えをはっきりさせることができた。また、歌詞に表すということが曲を集中して聴くことにつながり、曲の構成や曲の気分・感じを聴き取ることができたと感じている。歌詞に表すことで友だちの考えていることも体の動きで見るとより理解できたように感じる。また、作った歌詞を一緒に曲にあわせて歌うことで共有し、曲の面白さを味わうことができた。

この背景には、さまざまな要因があると感じている。1つは、『ぶっかりくじら』という教科書教材の歌詞作りである。いきなり歌詞を作るというのはやはり2年生にとっては難しい課題である。語彙も少ない子どもたちにとって使える言葉も限られている。そこででもともと2番まである歌詞に3番を作ろうともちかけ、歌詞作りを行った。くじらが遊んでいる様子・家に帰っていく様子などを8小節で表すことができていた。こういったスモールステップが今回の『シンコペーテッドクロック』の歌詞作りへとつながった。

次に、音遊びである。偶然的に音を見つけることもあるかもしれない。でも、自由の中に課題をきちんと与えておくことが重要だと考える。「楽器を触ることができて嬉しいな。」で終わるのではなく、「どんな音がするのだろう。」「この楽器はどれと仲間だろう。」と考えながら音遊びをしたことが曲の中に登場する楽器への興味につながったと考える。

最後に「かく」ことに慣れておくことである。2年生の子どもたちにとって「かく」というのは時間のかかることである。大げさに言えば、名前を書くだけでもずいぶん時間をとってしまう。毎授業というわけにはいかないが、普段からほんの少し「かく」ことを授業に取り入れておくと、「かく」ことへの負担を感じなくなるようである。

こういったことから、子どもたちは『シンコペーテッドクロック』の面白さに迫れたと感じている。

しかし、1人ひとりの思いを大切にしたいため、1つの作品として完成させることが難しい結果となった。5回繰り返される旋律にのせて、1人ひとりの歌詞をつなげ、お話ししたいと考えているところもあったのだが、1人ひとりの思い描いている情景が全く違うためかなり困難な状況となった。また、ペア学習の時間を多くとることもできなかった。これは、1人ひとりの思いが強いために2人で作るということが難しくかつ

たからである。だからこそ、作ったものをペアで紹介し合うという時間を設けるべきであった。授業の時間では紹介する作品が限られてしまい、いろいろな歌詞を全体に広めることができなかった。

また、「広く・浅く」を心がけて子どもたちに曲を紹介してきたのだが、結果的にアンダソンの曲に偏ってしまった。鑑賞においてこの1年間で『トランペット吹きの休日』『シンコペーテッドクロック』『そりすべり』とアンダソンのものが続いた。しかし、その中で良かったところもある。3曲目の『そりすべり』を学習したときのことである。「かく」活動として、アンダソンへの手紙の時間を設けた。すると、「アンダソンさんってすごいね。ウッドブロックを時計の音にしたり、馬の走っている音にしたりして、すごくおもしろかったよ。そんなこと思わなかったよ。すごいね。」と、楽器を中心に2曲をつなげて考えている子どもがいた。また、「スレイベルがずっとなっていて、馬が走っているのがよくわかって、ぼくは1番『そりすべり』が好きだよ。」と、楽器の演奏から様子を思い浮かべている子どももいた。また、「アンダソンさん、おもしろい曲をいっぱい作ってくれてありがとう。」という手紙を書いている子どももいた。たまたまであったが、同じ作曲家の曲を聴くということも子どもたちにとっては新しく発見できる場所があったのかもしれない。

さらに、「かく」という活動は、考えたことが残ることである。残ることで、子どもたちは「この間、こんな風に思ったんだ。」と振り返ったり、「あのときはこうだったけど、今はもう違う考えだな。」と自分の変化を感じたりすることができた。週に2時間という時数だからこそ、残したもので確かめるということが有効になるのであろう。

最後に、子どもたちが「もっと歌いたい。」とか「鍵盤ハーモニカで演奏したい。」という気持ちになるためには達成感が必要ではないかと考える。「こんなことがわかってよかった。できるようになってよかった。」と満足した先に、「学んだことを活かして伝えたい。相手を感動させたい。」という気持ちを強くもつようになるのではないかと感じている。子どもたちの表現が受け入れられ、拍手をもらうことが子どもたちに達成感を与え、「音楽って楽しい。」という気持ちを大きくするのだと考える。

参考文献

和歌山大学教育学部附属小学校紀要

第33集 2009年3月

小学校新学習指導要領(2008年3月告示)

秋田喜代美, 2010

教師の言葉とコミュニケーション 教育開発研究所
村上芳雄, 1966

主体的学習実践のための学習方法訓練細案

明治図書